

# よみがえれサンゴ礁！世界にひろがる再生の活動

サンゴの白化現象は世界的にひろがっています。2004年7月2日沖縄県宜野湾市で開催された「第10回国際サンゴ礁シンポジウム」の閉会式において、危機にある世界のサンゴ礁の保全と再生に関する「沖繩宣言」が採択されました。（次回【第11回】のシンポジウムは、2008年に米国フロリダ州において開催されることが決定しています。）

世界自然保護基金(WWF)が各国の被害状況をまとめましたが、特に沖縄県南西諸島周辺は2番目に危険度の高い「絶滅危機」にランクされています。

1995年に実施した環境庁の調査では、南西諸島海域にある約96000ヘクタールのサンゴ礁の約1500ヘクタールが失われたと報告されています。（その面積は東京ドーム約320個分になります。）

このような状況をなんとか改善できないかと、サンゴ礁の保護と再生についての試みが各国でおこなわれています。

サンゴの再生は一般的に、サンゴを採取して断片をつくり、移植する無性生殖法が主流でした。しかし、この方法では健全なサンゴ群体の一部を破壊することになり、大規模な展開がなかなかできません。

そこで、サンゴ本来の産卵、受精、着床のメカニズムを利用して、移動可能な着床具に稚サンゴを植え付ける、有性生殖によるサンゴの移植が始まっています。

有性生殖法は、サンゴ群体への影響がない

ことと、無性生殖法に比べて遺伝子が偏らない点が評価されています。

現在、日本でも白化したサンゴ礁の領域に、あらたに人工的に孵化させた稚サンゴを植え付ける活動がおこなわれています。

有性生殖法のひとつ、東京海洋大の岡本峰雄助教授のプロジェクトをご紹介します。

岡本助教授の方法は日本最大のサンゴ礁「西礁湖」（東西約20キロ、南北約15キロ）の中でも、高い水温に負けずに、8年ぶりに息を吹き返している生命力の強いサンゴの受精卵を、独自の着床具で育てて、岩礁に植え付けるものです。

着床具は写真のような4cm位の磁器で、縦に重ねてサンゴの産卵期前に海底に設置し



着床具をいくつも重ねて使用します。



岡本峰雄助教授が考案した着床具。



1年半後、サンゴのモドリイシが生育しています。



台風などの影響に備えて、移動しやすいように設置。

## 阿嘉島臨海研究所のサンゴ礁再生法



左 / 人工孵化させたプラヌラ幼生。

右 / タカセガイ

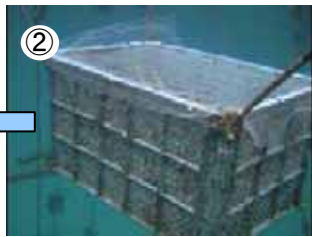


①

①特殊な基盤に着生させたサンゴは、そのまま海で育成すると海草が繁殖するので、海草を食べてくれるタカセガイを利用します。



③10ヵ月後、1mmだったサンゴが40mmに成長。



②

②サンゴやタカセガイを守るためにカゴに入れます。

最後に沖縄県阿嘉島<sup>あかしま</sup>臨海研究所が開発した再生法をご紹介します。

1999年に沈めた着床具ではテーブルサンゴが直径8センチほどに成長しているという、うれしい報告もあります。サンゴ礁の再生は、ほかにも多くの研究者や官民一体となった活動が展開されています。

失われたサンゴ礁をもとの姿に戻すには途方もない時間がかかることでしょう。しかし、このように少しずつですが再生への歩みが始まっています。

て浮遊するプラヌラ幼生の着床を待ちます。プラヌラ幼生の天敵であるナガウニは1cm以下の隙間に入れないので、幼生は順調に生育して、約1年半後には肉眼でもはっきりと識別できるようになります。